

事例報告

学齢期にある子どもを持つ母親の育児支援に関する研究

木戸久美子* 内山 和美** 北川眞理子*** 林 隆*

要約

本研究は、学齢期の子どもを持つ母親を対象とし、フォーカスグループインタビュー法を用いて子どもの成長とともに変化する育児の内容と母親が希望する育児支援のあり方を明らかにすることを目的とした。

母親が子どもに対して否定的な感情を持つ要因として、新生児期から就学前までは子どもの数や子どもとの相性が重要であると思われたが、子どもが学齢期になり母親が子どもと意志疎通可能になると、単なる子どもとの性格の不一致といった母親の主観に基づく認識のみで子どもに対する否定的な感情は芽生えにくくなることが推察された。

学齢期の子どもを持つ母親は、子どもを介した母親同士のつきあいでストレスを感じていたことから、学齢期に入ってから知り合うような子どもを介した母親同士の関係は育児上の悩みを話し合える友人関係には発展し難いことが推察された。

学齢期の子どもを持つ母親にとって、「人と話をする」ことがストレス対処行動として有用である可能性が示唆された。学齢期の子どもを持つ母親が育児に関する相談ができる友人関係を持つには、子どもの年齢が低いうちに育児について相談しあえる友人を作っておくことが重要であると思われた。

キーワード：学齢期、フォーカスグループインタビュー、育児支援

1. 緒言

近年、乳幼児期にある子どもを持つ母親の育児ストレスや育児不安、それに対する育児支援についての研究成果が報告されている^{1) 2)}。乳幼児期は、子育てへのとりかかきの時期であり、育児についての知識や技術の習得から精神的な面にいたるまで、周囲の支援を必要とする^{3) 4)}。育児支援に関する研究報告は、学齢期前児である乳幼児を持つ母親に対する支援が中心か、思春期にさしかかる頃の子どもに対して将来の健全な父性・母性の育成を目指した支援が中心である⁵⁾。

子どもが成長・発達する過程において行動面での問題が表出することがあり、子どもが学齢期になってはじめて育児困難を訴え育児支援外来を受診する場合もある⁶⁾。子どもの年齢が高くなるにつれ、母親にとって子どもと接した時間は長くはなるが、子どもの成長とともに子育ての内容は変化していくことから、安易に子育ての大変な時期を過ぎたとは言いきれない。

乳幼児を持つ母親を対象とした調査⁷⁾で子どもの成長にともなって母親のソーシャルサポート認知は低くなり育児に対する否定的な感情が高くなる傾

向があるとの報告もある。また、中学・高校生の親を対象とした調査⁸⁾では子どもの問題行動出現に際し、母親は父親より強い不安感を示し、子どもの問題行動をこれまでの子どもと自分との関係性で捉えようとする自責的な傾向が認められ心身の不調を訴えることが報告されているが、学齢期にある子どもを持つ母親の育児の実態と母親がどのような育児支援を望んでいるかについての調査はない。これからは、学齢期にある子どもを持つ母親に対しても育児支援していくことが母親の精神保健上、重要な課題になると考えた。

本研究は、学齢期の子どもを持つ母親を対象として、子どもの成長とともに変化する母親の子どもとの関係および育児に影響を及ぼす要因と母親が希望する育児支援のあり方を明らかにすることを目的とした。

2. 研究方法

1) 対象

学齢期の子どもを持つ母親4名を対象として、フォーカスグループインタビュー(以下FGIと略す)を行った。フォーカスグループインタビューの参加者は、A市在住の学齢期の子どもを持つ母親で市内

の任意の団体を通じて募集した。非就労者が就労者より育児ストレスを感じている者が多い^{9) 10)}との報告があることから、本研究対象者は非就労の母親とした。

2) 調査方法と手続き

本研究では、質的データを収集する方法として、FGI法を用いることにした。FGI¹¹⁾は従来からマーケティングの顧客ニーズを把握するために用いられてきた方法である。FGIは、ある一つのテーマに向けた焦点を絞り込まれた非常に組織化された集団討議であると定義付けられ、その目的は結論を出すことにあるのではなく、質的な情報を収集することにあるといわれる。

FGIは日本においては、顔見知りの方が話しやすいとの報告もある^{12) 13)}。育児については、お互いの様子をよく知り得ている方が話しやすいと判断し、本研究では、顔見知りによるFGIを実施することにした。

FGIを実施する場所として研究者の所属する大学の研究室を使用し、研究者1名がインタビューアーになり二時間を目安にインタビューを行った。インタビュー内容はカセットテープに録音した。研究対象者のインタビュー時の様子はインタビューアーが観察できた範囲でメモ用紙に記録した。インタビューに際し、事前の募集時に研究の趣旨を説明し、研究への協力とカセットテープへの録音に同意を得ていたが、インタビュー前に最終的な研究協力確認を行った。インタビューテーマを設定するにあたり、学齢期にある子どもを持つ非就労の母親2名に対し情報収集のためのインタビューを行った。学齢期にある子どもを持つ母親2名から子どもに対する否定的な感情を安心して露出する場があれば嬉しいという意見が聞かれたことから、今回のインタビューのテーマを子どもに対する否定的な感情を主として露出できるようにした。否定的な情動反応¹⁴⁾である「子どもに対して否定的な感情を抱くとき～怒り、苛立ちを感じるとき～」というテーマを設定した。研究対象者の背景把握のために、研究対象者の年齢と家族構成、職業の有無についての記載を求める調査票への記入を依頼した。

1. 現在から過去にさかのぼって思い浮かぶ具体的なエピソード、2. 子どもに対する否定的な感情をもったときの行動および対処法、3. 必要な支援

についての3つの視点を交えて話をしてもらうように依頼しFGIを実施した。

3) 分析の方法

結果の分析は、インタビュー中の参加者の発言内容を時系列的に記録した元データより、発言の内容から類似する情報の単位を作った。類似した情報単位にコードをつけるにあたってBordan & Biklen¹⁵⁾のコード化の基準を用いた。母性看護学専門の研究者と小児科医による合計4名の研究者間で協議し、さらに類似するコード単位をカテゴリーにまとめた。カテゴリー化されたものから各々のカテゴリー間の関連性について検討し、カテゴリー間の関連を図式化した。

分析の妥当性については、参加者に分析結果を返し確認した。

3. 結果

本研究対象である4名の母親からは「大学という背景のしっかりしたところで話をするので個人名が漏れないから安心」、「Aさんのようなきちんとした人でもそんな気持ち（子どもへの否定的な感情）を持つんだと思って安心した」、「普段いつも一緒にいるのにこんな話（子どもへ手をあげたこと等）はしたことなかったけど、いろいろ話せてもっと近くなれた気がする」、「またこんな機会を作って下さい」という意見が聞かれた。

本研究で得られた属性情報の概要を表1に示す。

インタビューの内容から得られた情報単位は186、4カテゴリーに分類できた。各カテゴリーを「母親が自覚する子どもとの関係性」、「母親の支援者」、「ストレスとストレスを感じたときの子どもへの対応」、「ストレス対処行動」と名づけた。各カテゴリーにはデータの内容からそれぞれサブカテゴリーを設けた。

以下に、各カテゴリー別に得られた情報を整理し、サブカテゴリーには下線を引いて示した。

育児は時期によりその内容が違ふことが想定されることから1) 出生直後から就学前まで、2) 就学以降、の2つに分けてデータを整理した。時期別の各カテゴリーの詳細を表2に示す。

表1 対象の属性

	母親の年齢	子どもの性別と年齢	家族形態	母親の状況	夫の状況	夫と育児について
ケース①	35歳	10歳男子, 7歳男子	核家族	無職 育児サークルに所属	会社員居 同	夫は子ども好きでよく休みには子どもと遊ぶ。妻は夫とは育児観が異なると感じている。
ケース②	37歳	10歳女子, 7歳男子	核家族	無職 育児サークルに所属	会社員居 同	夫はおとなしいタイプ。妻が育児のことをいろいろ話をするがだまって聞いている。
ケース③	43歳	16歳女子, 15歳女子, 10歳男子	核家族	無職 地域のスポーツクラブに所属	会社員 単身赴任	夫と子どものことはあまり話をしない。妻は夫とは育児観が異なると感じている。
ケース④	44歳	14歳男子, 11歳男子, 6歳女子	核家族	無職	会社員居 同	夫とは子どものことをよく話をする。妻は夫とは育児観が同じであると感じている。

「母親が自覚する子どもとの関係性」

1) 出生直後から就学前まで

子どもに対して否定的な感情を抱いた

「子どもが一人の時(きょうだいがいない時)は子どもに対してあまり腹が立たなかった」、「上の子(第1子)と、自分の性格が違う」、「上の子(第1子)よりも下の子(第2子)の方がかわいい」、「出かけようとしたときに『うんち』とか言われたとき、予定の時間に遅れたりすると、待ち合わせている友達から非難されるのではないかと思ったとき」

子どもに対しての気持ちが変化したとき

「夫がそばにいるときには大丈夫」、「きょうだい両方そろっているときはそんなに(自分が)切れなかった」

2) 就学以降

子どもに対して否定的な感情を抱いた

「勉強しないさいっていうと100くらい口答えされた。もうどうにでもなれっておもってしまった」、「何を言ってもきいてくれない。腹がたつ。」

子どもに対しての気持ちが変化したとき

「子どもの進学のことですと主人と意見の違いがあったが、子どもの気持ちを尊重し、自分だけは子どもを守ってやろうと思った」、「昔は下の子(男の子)がかわいかったけど、今は、上の子と性別が同じせいか、だんだん話が合うようになってきて、意識しなくてもかわいいと思えるようになってきた」、「年齢とともに私(母親)の気持ちを理解してくれるようになった」、「男の子だから子どもの年齢が高くな

れば強くなるし、あまり叩いているとそのことを覚えていて、後で仕返しされたりするのも怖い」

「母親の支援者」

1) 出生直後から就学前まで

夫

「子どもが生まれたときには(育児に関して)いろいろ期待していた」、「子どもに関することは全部話していた」

親族

「愚痴をきいてくれる」、「アドバイスしてくれる」

友人

「子どもを叩いてしまったときに、子育てサークルで知り合った友人にそのことを話すと、その友人も子どもに手をあげたという話をきいて、自分だけがそんなことをしているわけではないと思ひ安心した。それ以来ずっといろんなことを相談している」、「ちょっと年上の人で、自身の経験からいろいろな話をしてくれる人がいい」

2) 就学以降

夫

「だんだん育児に関して期待しなくなった」、「子どもの話はしない」、「子どもに関する話でも適当に抜粋して話をしており、全部は話をしない」、「お父さんに育児は無理と思う」、「主人は育児にストレスを感じていない」、「子どもがお父さんと二人だけだと緊張している。お父さんは子どもへの接し方がわからない」、「子どもが好きよね。休みのときはすぐ連れ出す」、「主人は子どもを叱らない。いつも私に叱

表2 カテゴリー別の詳細

カテゴリー	サブカテゴリー	出生直後から就学前まで	就学後以降	ケース
母親が感じる子どもとの関係性	サブカテゴリー 子どもに対して否定的な感情を抱いた	「目をパチパチさせるチック症状が出てきて、自分のせいではなさそうとするのに、全く治らなかつたとき…」 「子どもがいたはずで、ご近所の郵便受けから手紙を抜き取り川に流してしまつたとき…」 「妊娠のつわりで苦しいときに上の子が甘えてきたとき…」 「夫とけんかしたとき…」 「出かけようとしたときに、『うんち』と言われたとき…」 「上の子ども（第1子）と自分の性格が違う…」 「夫がそばにいるとき…」	「勉強しなさいっていうと100くらい口答えされた…」	③
	子どもに対しての気持ちに変化したとき	「きょうだい面方がそろつているとき…」 「男の子だから子どもの年齢が高くなれば強くなるし、あまり叩いているとそのことを覚えていて、後で仕返しされたりするもの怖い。」 「子どもが生まれたときは（育児に関して）いろいろな期待していた」 「子どもにも関わらず、全部話していた」	「子どもの進学のことで主人と意見の違いがあったが…子どもを守つてやろうと思つた」 「…今は、上の子と性別が同じせいか、だんだん話があつてきて…」 「年輪とともに私（母親）の気持ちも理解してくれてきた」	③ ②③④ ④
母親の支援者	夫	「夫がそばにいてくれるとき…」 「アドバイスをしてくれる」 「子どもを叩いてしまつたときに、子育てサークルで知り合った友人にそのことを話すと、その友人も子どもにも手をあげたという話を聞いて…安心した」 「ちよつと年上の人で、自分の経験からいろいろな話をしてくれる人がいる…」	「だんだん育児に関して期待しなくなつた」 「夫とは価値観が異なる」 「子どもにも関わらず、全部話していない」 「単身赴任」 「お父さんに育児は無理と思う」 「主人は育児にストレスを感じていない」 「子どもがお父さんと二人だけだと緊張している…子どもへの接し方がわからぬ」 「子どもが好きよね。休みのときはすぐ連れ出す」 「主人子どもを叱らない。…主人がここでピシッと決めてくれれば…」 「子どもの受験のことも、夫と話ができないけど、母親は聞いてくれる…」 「子どものことを夫には全部言えないけど、姉とはいろいろ意見を言い合う」 「子ども同士は遊びの約束をしてくれるけど、母親同士で合うことはない」	①②③④ ①②③ ③ ①②③ ③ ①②③ ①②③ ③ ① ② ③ ②③ ②③ ①②③④ ①②③④
ストレス	子どもを介した母親同士のつきあい	「育児サークルも、はじめのころだと、中で仲良しが固まつている…」 「夫の帰りが遅くてイライラする」 「目をパチパチさせるチック症状が出てきて、自分のせいではなさそうとするのに、全く治らなかつたとき…」 「子どもがいたはずで、ご近所の郵便受けから手紙をぬきとり川に流してしまつたとき…」 「姑との関係があまりよくなかつたときに、夫の実家に行く…」 「友人とお互いのことを話して…」 「母親に電話する」 「姉と話を…」 「夫に話す」	「子どもの受験の話をして…気休めを言われて腹が立つた」 「子どもの学校関係で性格の合わない母親と接しないといけないとき」 「近所に友達がいなかつたので、下の子がまだ小さかつたので、育児サークルに行つたが、サークルの他の母親と年齢差があり、話が合わない」 「子どもの進学で意見が合わず、主人のことが一番ストレス」 「勉強しなさいっていうと100くらい口答えされた…」	③ ①②③④ ④ ③ ③
ストレス対処行動	子ども自身 その他 人と話をする スポーツ その他	「夫の帰りが遅くてイライラする」 「目をパチパチさせるチック症状が出てきて、自分のせいではなさそうとするのに、全く治らなかつたとき…」 「子どもがいたはずで、ご近所の郵便受けから手紙をぬきとり川に流してしまつたとき…」 「姑との関係があまりよくなかつたときに、夫の実家に行く…」 「友人とお互いのことを話して…」 「母親に電話する」 「姉と話を…」 「夫に話す」	「電話相談に2回くらい電話した…」 「子どもの学校の先生で、担任ではない先生に話をした…」 「子どもにも関わらず、主人のテーマにした講演会に参加して、終わつたあとに母親同士で話しができてよかつた」	③ ① ②③ ③ ③

らせて、自分は子どもにいい顔をする。主人がここでビシッと決めれば、子どももきつとシャキッとするはずなのに、「子どもの進学で意見が合わず、主人のことが一番ストレス」

親族

「子どもの受験のことも夫と話ができないけど、母親は聞いてくれるし、自分と意見が同じ」、「子どものことを夫には全部いえないけど、姉とはいろいろ意見を言い合う」

友人

「子ども同士は遊びの約束をしてくるけど、母親同士であることはない」、「子どもが小さいときに育児サークルで出会った友達がいろいろ相談できる」、「子どもの参観日、知り合いがいない」、「その地域(学校のある)の幼稚園も保育園も出ていないと知り合いがなくて、参観日のときに話し相手がいなくて、他のお母さんは固まって話しをしているけど、私は一人って感じだった」

「ストレッサーとストレスを感じたときの子どもへの対応」

1) 出生直後から就学前まで

子どもを介した母親同士のつきあい

「育児サークルも初めての所だと、中で仲良しが固まっていて後からは入りにくいから、せっかく行っても嫌ですぐに行かなくなる」

夫

「夫の帰りが遅くて、イライラする」

子ども自身

「子どもが幼少のときに、目をパチパチさせるチック症状が出てきて、自分のせいでチック症状が出ているのではないかと他人から言われたくないと思って、やめさせようとするのに、全く治らなかったときに、子どもを叩いたことがあった」、「子どもがいたずらで、ご近所の子の郵便受けから手紙を抜き取り川に流してしまったときに、他人から自分が責められるのではないかと思い、子どもを叩いた」

その他

「姑との関係があまりよくなかったときに、夫の実家に行ったときに、むしゃくしゃして、子どもを抱いていた手をゆるめてしまい、子どもを落としたことがある」

2) 就学以降

子どもを介した母親同士のつきあい

「子どもの受験の話をして、勉強ができる子の母親から、「大丈夫よ」と安易な気休めを言われて腹が立った」、「子どもの学校関係で、性格の合わない母親と接しないといけないとき」、「近所に友達がいなかったの、下の子がまだ小さかったので育児サークルに行ったが、サークルの他の母親と年齢差があり、話が合わない」

夫

「子どもの進学で意見が合わず、主人のことが一番ストレス」

子ども自身

「勉強しないさいっていうと100くらい口答えされた。もうどうにでもなれって思ってしまった」、「何を言っても聞いてくれない。腹が立つ。」

「ストレス対処行動」

1) 出生直後から就学前まで

人と話をする

「友人とお互いのことを話する」、「母親に電話する」、「姉と話をする」、「夫に話す」

2) 就学以降

スポーツ

「自分で公民館に電話して、地域のスポーツサークルを紹介してもらい、ママさん〇〇に参加している」

人と話をする

「電話相談に2回くらい電話した。同じ市内の知り合いかとおもうと詮索されるのではないかと思っ、電話するまでに2週間くらい悩んだ。電話でアドバイスされたことは自分でも分かっていることばかりだった。」、「子どもの学校の先生で、担任ではない先生に話をした。ちゃんと時間をとってくれて、話をきいてくれた。子どものこともある程度知っている、話がわかってもらい易いし、自分が気付かないようなことをアドバイスしてもらえた」

その他

「自分の行動を夫に内緒にすることでストレス発散している。スポーツクラブへは、夫の把握している日以外にも出かけている」

4. 考察

本研究対象である4名の母親からは「大学という背景のしっかりしたところで話をするので個人名が漏れないから安心」、「Aさんのようなきちんとした

人でもそんな気持ち（子どもへの否定的な感情）を持つんだと思って安心した」、「普段いつも一緒にいるのにこんな話（子どもへ手をあげたこと等）はしたことなかったけど、いろいろ話せてもっと近くなれた気がする」、「またこんな機会を作ってください」という意見が聞かれた。FGI実施機関への安心感からFGI参加者は正直に自分の気持ちを表出することができ、またグループダイナミクスに基づきお互いの話の内容の相互作用によりさらに深みのある情報が出されたと思われた。

本研究の対象者数が4名と少ないため、本研究結果から断定的なことは言えないが、全対象者が非就労の母親であり、非就労の母親では育児ストレスを感じやすい^{9) 10)}。本研究は、育児ストレスが高いことが想定される対象から得られた貴重なデータを収集・分析するもので、育児支援の方策を考える上で大変有益であると考えられる。

1. 母子の関係性

母と子の関係は、父と子の関係よりも密接であり、母親が子どもに対する人的環境として直接的に子どもへ影響を及ぼすこともある^{16) 17)}。妊娠中は、母体環境が、胎児の健康状態に直接影響する¹⁸⁾ことから、出産後も授乳等、母親の健康状態や生活様式は、児に及ぼす影響が大きい。子どもは、時間的な経過とともに母親との関係だけでなく、父親との関係も深くなると思われるが、父親を対象とした研究よりも母親を対象とした研究が数多くあることから、日本の多くの家庭では、育児に関わる時間は母親の方が圧倒的に多いことが推測される。母親は日常生活で子どもと関わる時間が長いことから、子どもの生活環境として大きな存在でもあると思われる。

本研究結果から、子どもの出生直後から就学前までの時期で母子関係については「子どもが一人の時（きょうだいがない時）は子どもに対してあまり腹が立たなかった」という言葉や「上の子（第1子）と、自分の性格が違う」、「上の子（第1子）よりも下の子（第2子）の方がかわいい」などの意見があった。躰と称して体罰を行っているのは、子供を2人以上持つ母親に多い傾向がある¹⁹⁾との報告もあり、自分の子どもが複数人いると、子ども同士を比較し、子どもと母親の性格の不一致が子どもに対する否定的な感情を芽生えさせる要因になる可能性が示唆された。本研究では、このような感情を母親が抱く時

期は、出生直後から就学前までの乳幼児期のみで、子どもが就学した後の母子関係は、「昔は下の子（男の子）がかわいかったけど、今は、上の子と性別が同じせいか、だんだん話があうようになってきて、意識しなくてもかわいいとおもえるようになってきた」、「年齢とともに私（母親）の気持ちを理解してくれるようになった」などから、母親は子どもと意志の疎通が図れるようになると、単なる子どもとの性格の不一致といった母親の主観に基づく認識のみで子どもに対する否定的な感情は芽生えにくくなることが推察された。以上より、子どもの年齢によって、母親が感じる子どもとの関係性は変化することを意味しているものと考えることができた。

子どもの心理・社会的側面や性格に対する親の捉え方について母親が否定的認識を抱くと育児不安が高まる²⁰⁾との報告もあり、出生直後から就学前までの乳幼児期には母親が子どもとの性格等の違いにより子どもに対して否定的な感情を持ち易く、育児不安に陥りやすい傾向があることなどを育児支援者は理解しておくことが重要であると思われた。

2. 学齢期にある子どもを持つ母親の感じる育児ストレスと母親を取り巻く周囲の環境

母親が感じる子どもとの関係性には、母親を取り巻く周囲の人間関係として夫や姑などが影響しており、子育て時間の経過とともに変化することが示唆された。

「授乳やおむつ換え等の育児行動で疲れると思ったことはあるが、それだけで腹が立ったりしたことはない」という言葉から、本研究の対象者については、子どもの年齢が低年齢であるうちは、頻回な哺乳やおむつ交換といった育児行動が主で、身体的疲労は大きいですが、身体的な疲労のみで子どもに対する否定的な感情は記憶されていないことが分かった。「姑との関係があまり良くなかったときに、夫の実家に行ったとき、むしゃくしゃして、子どもを抱いていた手をゆるめてしまい、子どもを落としたことがある」など身体的な疲労の上に夫や姑との関係が精神的な負担になったときに子どもに対して否定的な感情を抱きやすいことが示唆された。

また、子どものチックやいたざらといった自分の意に反した行動を子どもがとる場合や子育てが悪いと他者から評価されることを気にしたときなどに子どもに対して否定的な感情を抱きやすいことが示唆

された。

母親が子どもに対して否定的な感情を抱きながらも、夫がそばにいるときや否定的感情の対象となる子どもが他のきょうだいと共にいる場合など第三者が介在するときに、自分の行動に抑制が効き理性的に行動できていた。母親が子どもに対して否定的な感情を持った場合に理性的に行動するには、子どもと母親を長時間にわたって一対一にしないことが重要であると思われた。乳幼児における調査においても子どもと家庭で長時間過ごす母親が子どもに対して命令口調や叩くといった態度を示すことが報告されている²¹⁾。

子どもの年齢が高くなると、「何を言っても聞いてくれない。腹が立つ。」など、子どもと母親との間の心理的な葛藤が大きくなり、子ども自身がストレスになる場合もあるが、「子どもの進学のことと主人と意見の違いがあったが、子どもの気持ちを尊重し、自分だけは子どもを守ってやろうと思った」など、時間の経過とともに子どもとの間に信頼関係が築けている場合は、子ども自身がストレスになったとしても、子どもに対する感情が否定的なものへと短絡的に結びつくことはないとも思われた。

3. 母親のストレス対処行動

母親のストレス対処行動は、子育て期間の長短に関係なく、「人と話をする」ことであり、子どもが乳幼児期には育児サークルなどで親密な友人を作るか、または親族等絶対的な信頼のおける人などの精神的な支えを得ることが重要であると思われた。育児サークルについては、「育児サークルも初めての所だと、中で仲良しが固まっていて後からは入りにくく、せっかく行っても嫌ですぐに行かなくなる」という意見もあり、育児サークルに初めて参加する母親が居心地よく過ごせる工夫も必要であると思われた。また、親族がなく絶対的信頼のおける人的環境に恵まれていない母親が孤立することなく地域ぐるみでサポートしていく体制を早急に作ることも重要であると思われた。

育児サークルは、乳幼児を持つ母親を対象としたものが多く、同世代で同じような経験をしたことがある母親同士では結びつきが強くなり、友人を得やすい。子どもが学齢期になると、子ども同士は仲間をつくり親から独立していくが、「子どもを介した

母親同士のつきあい」はなくなり、母親同士では、自分の置かれた状況を理解しない発言や意見の相違などを強く感じやすく、子どもを介した母親同士のつきあいがストレスになる場合もある。子どもが学齢期になると、あらためて育児に関して相談できるような友人を作ることには困難であると思われた。また、夫婦関係の善し悪しによって夫と育児に対するスタンスが異なっている場合では、夫との関係もストレスになるとの本研究結果と同様の報告もあり²²⁾、夫は子どもの話題を共有できる相手ではなくなってくることも考えられた。母親は、子どもが学齢期以降に、友人もなく、夫が育児の相談相手になれない場合には容易に社会的孤立を招きやすくなる。子どもの年齢が低いうちに育児について相談しあえる友人を作っておくことが重要であると思われた。

4. 学齢期にある子どもを持つ母親の育児に関する社会的支援体制

母親のストレス対処行動のうち「人と話をする」では、友人や親族といった支援者以外にも、「電話相談に…電話した。」との意見があった。「プライバシーが守られるのか不安である」との意見もあり、電話相談員の資格や事業のあり方も見直す必要があることが推察された。電話相談の利用者に相談内容の守秘に関する安心感を与えるために、相談員のバックグラウンドなどを示すことも必要ではないかと思われた。また、電話相談事業の紹介資料などにはプライバシーの厳守を明示することは必須である。気安く相談するには、電話だけでなく、インターネットを介した相談活動も増やしていく必要があると思われた。

本研究結果から母親の気持ちに共感を示し、示唆を与えてくれる人が身近な学校現場にいる場合もあることが分かった。「子どもの学校の先生で、担任ではない先生に話をした。ちゃんと時間をとってくれて、話を聞いてくれた。子どものこともある程度知っているの、話がわかってもらいやすいし、自分が気付かないようなことをアドバイスしてもらえた」など、学校の教員は子どものことをよく知っており、母親の気持ちにも共感できる立場にある。学齢期以降の子どもを持つ母親にとって身近な存在である学校に相談窓口を設置することを検討してもよいのではないかと思われた。

以上の考察をもとに各カテゴリー間の関連を図式化し図1に示した(母親の育児行動に影響を与えていると思われたカテゴリーは実線の矢印で結び、肯定的な影響と否定的な影響の相反する影響があると思われるカテゴリーは点線の矢印で結んだ)。ストレス対処行動が有効な場合と有効ではない場合もあると思われるため、点線で母親の育児行動と結んだ)。

国外では、親への育児技術獲得のためのペアレントトレーニングの実施²³⁾についての報告もあり、今後日本においても、子どもの年齢に関係なく、親の育児行動をサポートする機関の設置が必要であると思われた。

4. 結論

- (1) 母親が子どもに対して否定的な感情を持つ要因として、新生児期から就学前までは子どもの数や子どもとの相性が重要である可能性が示唆された。
- (2) 子どもが学齢期になり、母親が子どもと意志疎通可能になると、子どもとの相性の善し悪しだけが子どもに対する否定的な感情を持つ要因にはならない可能性が示唆された。
- (3) 本研究の対象である学齢期の子どもを持つ母親は、子どもを介した母親同士のつきあいでストレスを感じていたことから、学齢期に入ってから知り合うような子どもを介した母親同士の関係は育児上の悩みを話し合える友人関係には発展し難いことが推察された。
- (4) 学齢期の子どもを持つ母親にとって、「人と話をする」ことがストレス対処行動として有用である

可能性が示唆された。母親は、子どもの年齢が低いうちに育児について相談しあえる友人を作っておくことが重要であると思われた。

文献

- 1) 足達淑子, 温泉美雪ほか. 1歳6ヶ月児の母親の養育行動—質問票調査からみた具体的行動、育児ストレス認知の関係について—, 行動療法研究, 2000, 26(2), 69-82.
- 2) 加藤道代, 津田千鶴. 育児初期の母親における養育意識・行動の縦断的研究, 小児保健研究, 2001, 60(6), 780-786.
- 3) 荒木美幸, 大石和代ほか. 育児期にある母親に対するソーシャルサポートと育児ストレスとの関連, 長崎大学医療技術短期大学部紀要, 2001, 14(1), 89-95.
- 4) 金岡 緑, 藤田大輔. 乳幼児を持つ母親の特性的自己効力感及びソーシャルサポートと育児に対する否定的感情の関連性, 厚生学指標, 2002, 49(6), 22-30.
- 5) 岩崎寛和. 母性を育む思春期管理のあり方, 母性衛生, 2003, 44(1), 11-14.
- 6) 浅井朋子, 杉山登志郎ほか. 育児支援外来を受診した学童79人の臨床的検討, 小児の精神と神経, 42(4), 2002, 293-299.
- 7) 藤田大輔, 金岡 緑. 乳幼児を持つ母親の精神的健康度に及ぼすソーシャルサポートの影響, 日本公衆衛生雑誌, 49(4), 2002, 305-313.
- 8) 永松優一. 思春期神経症障害の両親の精神保健に及ぼす影響について, 九州神経精神医学, 47(1), 2001, 7-23.

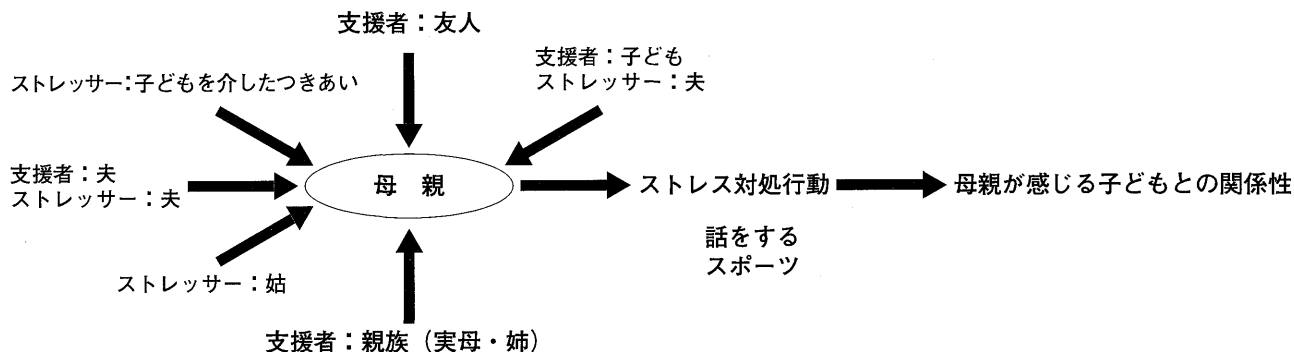


図1 各カテゴリー間の関連からみた母親の育児行動に影響する要因

- 9) 西村真実子, 津田朗子ほか. 石川県における乳幼児の育児の実態と母親の意識. 小児保健研究, 59(6), 2000, 674-679.
- 10) 坂間伊津美, 山崎喜比古ほか. 育児ストレインの規定要因に関する研究. 日本公衆衛生雑誌, 46(4), 1999, 250-262.
- 11) 郷良淳子. フォーカスグループの方法論—文献レビューを通して—. 大阪府立看護大学紀要, 2002, 8(1), 79-86.
- 12) 瀬島克之, 杉澤廉晴ほか. 質的研究4 フォーカスグループの実際的方法論の一例. プライマリ・ケア, 2001, 24(2), 126-132.
- 13) 瀬島克之, 杉澤廉晴ほか. 質的研究における方法論の妥当性に関する検討—フォローアップアンケートの結果から—. プライマリ・ケア, 2001, 24(4), 277-284.
- 14) 清水嘉子. 育児ストレスの実態研究—ストレス情動反応を中心にして—. 母性衛生, 44(4), 2003, 372-378.
- 15) Bogdan RC & Biklen SK. Qualitative research for education: An introduction to theory and methods (3rd ed) .Boston Aiiyn and Bacon. 1997.
- 16) 前垣よし乃, 森俊彦. ネグレクトの1例. 臨床小児医学, 48(3-4), 2001, 99-102.
- 17) GomibuchiKumiko, GomibuchiTakashi, AkiyamaTsuyoshi. A 10-year-old Girl with Obsessive-Compulsive Disorder: Discussed in terms of Families Having Marital Difficulties and Expatriate Children. 児童青年精神医学とその近接領域, 41(Suppl), 2000, 30-37.
- 18) 山本明代, 常石秀市ほか. 母体環境と胎児成長. 小児内科, 35(3), 2003, 381-385.
- 19) 大瀬栄子, 佐々木純子ほか. 虐待に関する母親の実感アンケートの結果より. 健生病院医報, 26, 2003, 31-41.
- 20) 原田繭子, 黒田康子ほか. 育児不安と母親の子どもに対する認識の関連. 日本看護学会論文集 33回小児看護, 2003, 139-141.
- 21) 小野寺敦子. 育児ストレスとタイプA行動. タイプA, 11(1), 2000, 49-56.
- 22) 船越和代, 榮玲子ほか. 乳幼児期の子どもを持つ母親の育児ストレス(第2報). 香川県立医療短期大学紀要, 5, 2004, 17-23.
- 23) Hughes J.R. The effect of the Webster - Stratton parent program on the parenting skills of maltreating mothers and the autonomous self - regulation of their preschool/early school age children. McGill University. 2000, 302.

Title : The support of child rearing for mother who had school age children

Author : Kumiko KIDO*, Kazumi UCHIYAMA**, Mariko KITAGAWA***, Takashi HAYASHI*

* Yamaguchi Prefectural University, School of Nursing

** Siebold University of Nagasaki, Faculty of Nursing and Nutrition

***Nagoya City University, School of Nursing

Abstract

This study was aimed at clarifying the child care support that mother who had a child of school age hoped for. The subjects were four mothers who had children of school age. We carried out focus group interview and were able to clarify the following.

As the factor that mothers had negative feelings for their children, the number of children and affinity with a child were important factors at from neonatal period to school age. When the children grew to school students and took easy to communicate with their mothers, the affinity with children was not important factor to have negative feelings for their children.

Mothers having children of school age felt stress in the group activities related children. For mother having a child of school age, these group activities were hard to develop for friendships relation to be able to talk about troubles in their children caring.

For mother having a child of school age, it is useful as stress coping behavior to talk with friends. For making the friends whom we talk about child caring in school age of their children, it was important to have the friendships of talking about the caring while pre-school age of the children. When children grew to school age, to make the places of the mothers gathering and communicating together was necessary.

The mothers had the opinions that administrative child care consultation services must to be rearranged with taking in the opinions of users.

Key words : school age, focus group interview, child rearing
